

《核医学の展望》

核医学機器の使用状況に関する調査報告

第19回日本核医学会総会プログラム委員会代表
調査実行委員会代表

千葉大学教授 有 水 昇

核医学の発展は装置の進歩、放射性薬剤の開発によって支えられている。装置に関しては、最近性能の急速な進歩が見られ、このうち進歩の著しいものはシンチ・カメラの解像力、電算機の処理能力、RIA 装置の自動化であり、いずれも診断精度の向上、診断域の拡大に役立っている。

しかるに一方では、最近、CT および超音波による断層撮像技術の著しい進歩と普及があり、核医学画像診断に対してインパクトを及ぼし、画像診断領域にある程度の修正をもらしつつあることも否定できない。このような情勢から、わが国の核医学の現状、とくに、核医学機器の利用状況を認識することは核医学全般の現状認識に役立つばかりでなく、将来の動向を推察するのにも有用であろう。

以上の趣旨から本学会長 飯尾正宏氏は総会実行委員会に「日本における核医学機器の利用状況の調査報告」を指示した。このような調査は米国でも必要性を認められ、米国核医学会内の委員会において調査が行われ、米国核医学会総会(1979年)に於いて調査結果の発表が行われた。

総会実行委員会は日本アイソトープ協会の協力を得て、アンケート調査を実施した。調査対象は前年度放射性薬剤を使用する in vivo 診断および in vitro 検査の全施設、約 1,140 施設である。第1次調査はアンケート郵送方式による調査であり、これによって約 50% の回答率を得た。第2次調査は電話による直接アンケート方法を行った(全回答率86%)。

調査内容は、シンチカメラ・電算機・スキャナ・in vitro 機器等の種類とその稼動状況、使用年限が主なものである。また、将来購入したい機器等についても調べた。装置の性能および台数にかなりの地域格差が示された。